



赤い羽根共同募金助成事業

静岡発 福祉文化の創造を切り拓く

若者発 ご近所福祉かるた 利用の手引き



静岡福祉文化を考える会

はじめに

今、改めて、「ご近所のつながり・ささえあい」が求められる時代を迎えています。本会では、平成26・27年度の2年間にわたり、243名の若者が、「分散型訪問型学習」として長寿者宅を訪問し、住み慣れた地域で生活している長寿者から、長寿者を取り巻く現状と若い世代に託したい思い・願いを真剣に学びました。

そして、「これからのご近所のあるべき姿」を若者の視点に、地域づくりの議論を積み重ねてきました。これらの議論を形にしようと努力し、「赤い羽根共同募金助成事業」により、ここに「“若者発”ご近所福祉かるた」が誕生しました。

このたび、「かるた」のさらなる活用拡大と住民福祉教育開拓を目的に「かるた」の増刷とともに「かるた 利用の手引き」を「焼津福祉文化共創研究会」と「共創社会実現研究会」のご協力をいただき作成いたしました。

この「かるた 利用の手引き」をもとに、さらに、各地で、地域づくりの一助として、「かるた」を積極的に活用していただくことを期待します。

令和3年11月27日

静岡福祉文化を考える会

目次

- 第1章** ご近所福祉ってなに？ 今、改めて、ご近所のささえあいを考える時…… 1
- 第2章** 「“若者発”ご近所福祉かるた」はどうして誕生した？ …… 4
- 第3章** 「静岡発福祉文化の創造」と“ご近所福祉”へのプロセス …… 8
- 第4章** 「“若者発”ご近所福祉かるた」を紹介します …… 12
40のキーワードで、ご近所福祉を学びます
- 第5章** 「“若者発”ご近所福祉かるた」各領域からの活用事例 …… 18
- 第6章** 「“若者発”ご近所福祉かるた」の活用方法は無限です …… 21
◇「活用レポート」をお寄せください

第1章 ご近所福祉ってなに？

今、改めて、ご近所のささえあいを考える時

1. 懐かしいあの頃のご近所の風景

「ご近所ってなに?……」、「ご近所づきあいは苦手」、「どこまで、ご近所同士の付き合いは必要?」と、こんな会話がよく町内会や自治会の集まりの中で、中でも、特に若い世代の方々の会話で飛び交っています。昔はずいぶん離れてもご近所意識で、「回覧板」や「日掛け」(隣組同士が、一定の額を積み立てて、親睦等に使用するために、小箱を定期的に回していた。)は、ごく自然に回っていました。地域全体が日常的につながり、大人社会も子ども社会も、そこに、ご近所意識が共有していたように思います。



2. 家庭・家族機能のご近所をつないでいた

昭和の時代を回想してみると、家族機能の中に、ご近所意識が組み込まれ、親同士の日頃からの付き合いが子どもたちにも伝わり、そこには、家族ごとにつながる連帯的地域の環境が存在していたのと感じます。

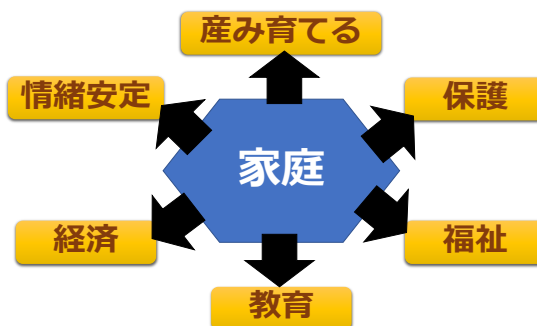
右図で「基本的な家庭・家族機能」を示してみました。「生み育てる機能」、「保護的機能」、「福祉的機能」、「教育的機能」、「経済的機能」、「情緒安定的機能」等、6つの機能がそれぞれの家庭・家族の中に、しっかりと根づいていました。

その機能は、家族単位でつながりを持ちながら、ご近所のささえあいをつくり上げていく上で大いに活かされていたように思います。

ご近所にお子さんが誕生すれば、我が家のごとく、みんなで祝福し、忙しいときには、子どもさんをしばらく面倒見てもらい、近所の子どもであれば、叱りもし、またほめたりすることは、ごく当たり前でもありました。暇なときには、それぞれの家庭の縁側に集まっては、世間話で、時間を費やし、地域を知り合うこともできていました。

今の時代、専門性と市民性が融合することは、なかなか難しいことですが、あの時代は、「他人」(知らない、関わらない)では決してなく、「他者」(知らない、関わる)以上に、「他己」(知っている、関わる)で地域のつながりは強い「地域力」、「住民力」があり、そこに「ご近所のつながり」が強く、問題を解決する力も、存在していたように思われます。

あの時代を再現することはできませんが、今改めて、「ご近所のささえあい」について、考える時代を迎えているように感じられます。



> 3種類の社会関係

他人 ・ 「知らない」「関わらない」

他者 ・ 「知らない」「関わる」

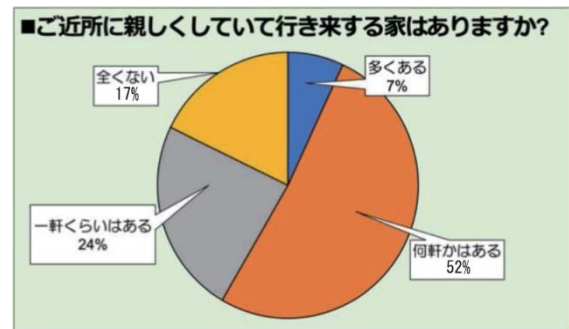
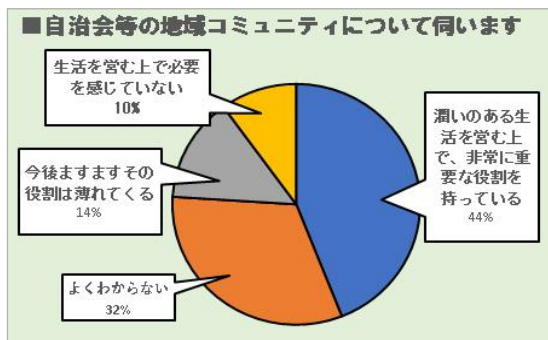
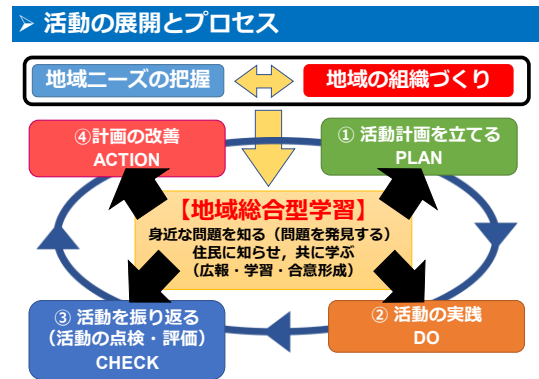
他己 ・ 「知っている」「関わる」

3. ご近所福祉その意識と実態から思うこと

「静岡福祉文化を考える会」では、平成8年度結成以来、「現場検証活動」、「地域把握活動」、「地域総合型学習活動」の3つの活動を柱立てに、25年間の活動に取り組んできました。中でも、重要な活動として取り組んできたのは、「地域把握活動」つまり「調査研究活動」をもとに「地域を知る」、そしてそこから問題解決策を探る取り組みです。これを図表化しますと、右図のようになります。地域の課題は何か、そして地域の組織体制の現状はどうか、しっかりと、住民主体の学び合い（「地域総合型学習」）につなげているかを検証していかなければなりません。

ここで、令和2年度に取り組みました「ご近所福祉その意識と実態調査」結果を紹介します。

「あなたの地域のコミュニティについて、あなたはどのようにお考えですか？」を回答の多い順にまとめると、「潤いのある生活を営む上で、非常に重要な役割を持っている」44%、「よくわからない」32%、「今後ますますその役割は薄れてくる」14%、「生活を営む上で必要を感じていない」10%と、地域コミュニティのあり方については、消極的な回答結果となっています。



次に「あなたは、ご近所に親しくしていき来する家がありますか？」の回答では、「何軒かはある」52%、「一軒くらいはある」24%、「全くない」17%、「多くある」7%となっています。この回答から、約4割の回答は、ご近所との日常的なつながりが薄い回答結果です。

さらに「今後、地域において困った状態の時、在宅生活を維持していくために必要と思われる支援・サービスについてお答えください」の回答順から、10項目を紹介します。

- | | |
|----------------------|-----|
| ① 「見守り・声かけ（安否確認）」 | 27% |
| ② 「災害時の手助け」 | 17% |
| ③ 「同行（買い物・通院等）支援」 | 9% |
| ④ 「移動支援」 | 9% |
| ⑤ 「話し相手」 | 7% |
| ⑥ 「簡単な介助・介護」 | 7% |
| ⑦ 「定期的なふれあいサロン（居場所）」 | 7% |
| ⑧ 「子育て支援」 | 5% |
| ⑨ 「配食」 | 5% |
| ⑩ 「ゴミ出し」 | 4% |

すべての年代で、①「見守り・声かけ（安否確認）」、②「災害時の手助け」の回答が高い。30代では、3番目に「子育て支援」の回答が高い。男女別も同じ傾向の回答結果です。回答の全てが「ご近所」におけるささえあいに関わる内容だと考えられます。調査の最後に問いかけた「日頃から、地域において、災害等の対応として、地域のささえあい・助け合いの取り組みとして、大切なことは何か。」の回答の多い順から、

① 日頃からの挨拶・声かけ等近所付き合い	39%
② 日頃から各種会合や防災訓練に参加	20%
③ 地域の高齢者や障害者等の把握と情報の共有	15%
④ 地域と行政・福祉団体等との協働における支援体制の構築	9%
⑤ 災害及び地域ボランティアの育成（研修）	5%
⑥ 災害等に対応できる有資格・技能者の把握 （地域を総合的にコーディネートできる人材確保と活動助成支援）	4%
⑦ 行政・福祉団体の主体的地域との関わり	3%
⑧ 企業・学校・地域社会での「福祉教育」	3%
⑨ 要支援者への災害等情報伝達体制の構築	2%

「ご近所のささえあい」として、今後に生かしたい回答内容です。

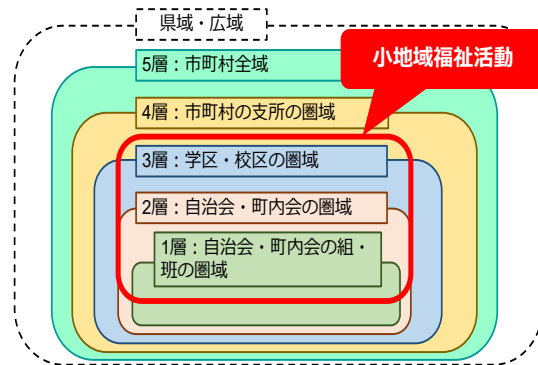
4. 「地域を家庭化」した、ささえあいと“ご近所福祉”

今日、家庭・家族機能の弱体化した状況の中で、せめて隣組（組・班）、そして自治会・町内会、さらには、小学校区・中学校区を単位として、地域の福祉問題等が解決できる仕組み、そこに「地域を家庭化」していく取り組みが求められています。

そして、昔からあった「おすそ分け」、それは、対等な関係、見返りを求めない、普段の生活の中で、信頼関係を基にした継続的關係等が今、私たちが求めている「ご近所福祉」に置き換えられるように感じられます。

▶ 重層的な圏域設定のイメージ

（ある自治体を参考に作成したものであり、地域により多様な設定がありうる）



▶ ご近所福祉とは？

1. お互いを認め合う
2. 対等である 上下をつくらない
3. 見返りを求めない
4. 継続的である
5. 無理がない

ご近所福祉 = **おすそ分け**

第2章 「“若者発”ご近所福祉かるた」 はどうして誕生した？

1. 若い世代が“ご近所”を学ぶプログラム

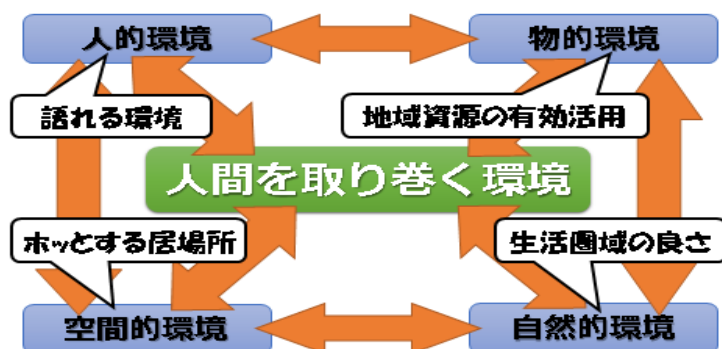
長寿者と語り合う機会があった時、その長寿者から、噴き出るように語られたことが、つい最近のように感じます。その長寿者が、切実に語られていたことは、「もっと、世代を超えた地域交流が出来ないものか」「特に若い世代の人に聞いてもらいたいことがたくさんある」「ご近所に住んでいて、感じることは、ご近所のことをだれが若い世代に教えていくのか」等、人生の先輩である長寿者が、若い世代に託したい思いが、ひしひしと伝わってきました。

私たちを取り巻く環境を考えると、4つの領域が考えられるといわれています。まず第1に「人的環境」（語れる環境）があげられます。

語れる環境をつくることこそ、問題解決の第一歩と言われています。しかし、今日では、容易に、物事を解決できる様々な手法が出来るようになり、人々の関係づくりは多岐にわたっています。

第2は、「物的環境」（地域の資源の有効活用）です。過去には、それぞれの家庭に居場所を持ち、話し合いの場もつくられていました。しかし、今日では、地域の中で語り合う場所づくりが求められています。第3は「空間的環境（ホッとする居場所）」、第4は「自然的環境」（地域の良さの発見）です。ここでは、特に、長寿者と向き合う語れる地域環境をいかにして作り出せるかを問題提起をしておきます。

▶ 人間を取り巻く4つの環境



2. 長寿者宅を2年間で、延べ24回243名の若者が訪問

本会では、平成20年度から平成26年度までの7年間、「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」（静岡県委託事業）に取り組みました。この事業は、長寿者（高齢者）が地域社会から孤立しないために、県民に向けた啓発事業の取り組みでした。

本会は、この大きな社会問題に取り組む課題として「1年次：長寿者（高齢者）の自立」「2年次：長寿社会への課題」「3年次：生活圏域における支えあいの仕組み（ご近所福祉）」「4年次：生活圏域における一人一人の居場所を考える」「5年次：家族ってなに？私の居場所はあるか」「6年次：ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり」「7年次：人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくりー長寿者をつなぐホッとするご近所づくりー」を事業のプロセスとして、

- (1)「地域総合型学習」 延べ41回の「公開型研修会」の開催（延べ2,000名の県民参加）
- (2)「地域実践活動の検証」 35市町のうち、60%の地区での実践展開
- (3)「調査研究活動」 7年間、毎年度テーマを設定し調査に取り組む

の3つの柱をもとに、課題解決に取り組みました。

この7年間の事業展開の中で、平成25年度・26年度の2年間「若者が長寿者から学ぶご近所福祉」を設定し、「長寿者を囲み本音で語る“ご近所福祉”のこれから」を研修テーマに、24回、延べ243名の若者（大学生）が当時98歳を生き生きと暮らす長寿者宅を訪問し、尊い長寿者から“本音で語るご近所福祉”を学びました。そして、地域社会で、いろいろと問われている「若者の地域参加」も課題解決の一助にして、考察をすることとしました。

ここでは、当時、長寿者宅を訪問し若者たちが、真剣に実社会で生活している長寿者から学んでいた様子を、写真で紹介します。



◇98年間を振り返り、若者からの質問に答えている姿



◇自分の祖父母と向き合うコツを引き出そうとする若者



◇誰だって、みんな年を取る、年寄りを大事にしなきゃいけない



◇若者への期待の問いかけに、年寄りを粗末にしないこと



◇ご近所を語る長寿者の話を、必死にメモを取る若者



◇15~20名が毎回、長寿者宅を訪問してご近所を学びあった

3. 長寿者から学んだ「真のご近所のあり方」とは

- (1)長寿者と日頃話をする機会がほとんどない若者は、時代をしっかりと回想する中で、地域をここので築いてくれたことに感謝をしなければならない。戦争も経験した尊い出来事を決して風化させてはならない、継承していく地域づくりに心掛ける。
- (2)私たちは、今日、物の豊かさの中で便利な生活をしているが、「心の豊かさ」を持ち続けて身近な生活圏域における、人とのつながりを大切にしていかなければならない。
長寿者が、今の社会を大変危惧している気持ちが伝わってきた。 将来に向けて、誰もが安心できる地域への貢献こそ大切だと感じた。
- (3)何か、ボランティアと構えている若者は、改めて、感じたことは、長寿者にボランティアをいただいていることに気づいた。ともに支え合う地域づくり、そこには、決して上下をつくらない。
- (4)祖父母とこれまで生活していた私にとって、長寿者から学び、我が家と重ねて考えることが出来た。
- (5)他者とのつながり、関連性について考えることができた。 改めて、若者が積極的に身近な地域に出て、果たして何が出来るかを考えさせられた。 ご近所福祉とは、共に支え合うことだと感じた。

(6)もっと、身近なご近所で、長い人生を生き抜いた長寿者の話しを、自ら学び取り、強く生きることこそ、地域参加の一步だと学びとることができた。長寿者のお話で元気をもらえる。また、若者が長寿者に元気を与えられる存在であることも学んだ。これまでは、長寿者と若者の話し合いは不思議な感覚を覚えていたが、また話し合いたいという心地よい環境であることもわかった。

4. 長寿者から若者へのアドバイス

- (1) 私たちと同じ年代のご苦労は
⇒医療が進歩していない時代、子どもを亡くし悲しんでいる家族を見た看護師時代の苦労。
- (2) パソコン・スマートホンの存在について
⇒私たちも使ってみたいという気持ちはあるが流行についていけない。若者は社会の流れについていかなければいけないが、実際に人と会って、向き合ったコミュニケーションをとることを忘れてはいけない。
- (3) 人と向き合う仕事で気をつけること
⇒相手を誤解しないように、相手をよく理解し信頼すること。
- (4) 価値観、感じ方の違いをどうすればいいのか
⇒同じ気持ちで考える。互いに良い面もあるので否定することなく対等な価値観を共有する。
- (5) 生きがいについて
⇒「最後の最後まで希望を持つ」「人と関わる」「健康で気力を持つこと」「生きがいは、自分のものと、支えてくれる周りの人にある」これが生きがいというものではなく、生きがいをつくるための周りの環境が大切。
- (6) 若者の自殺が多いことについて
⇒母親の変化（精神面）がある。命の大切さがわかっていない。子どもの育て方の違い、面倒なことに耐えられないなどが感じられる。
- (7) 大人社会に望むこと
⇒会話することの大切さや礼儀をもっと重んじてほしい。人は、親の背中を見て育つから親がしっかりとした礼儀作法を学ぶ必要がある。
- (8) 近所の人との会話は身内の人とは違うのか
⇒違う。近所の人とは昔話もでき身内にも言えないことが言える。身内の人歩み寄ってほしい。
- (9) これまでの人生で、経験された中で役に立ったこと
⇒言葉かけをすること。大勢の人と接すること。人脈やつながりをもつこと。コミュニケーションや会話を大切にすること。
- (10) 現在の若者をどう思うか
⇒長い人生で、これまで、じっくりと本音で若者と話す接点が無かった。若者たちと話したことで、若者の気持ちが理解できるし、私も若返る。
- (11) 死について考えたことはあるか
⇒長寿者はとにかく淋しい。家族や周囲が大切にしておいてあげること。感謝の念をもつこと。

5. 長寿者から学んだ「ご近所福祉」とは

- (1)ご近所福祉の始まりは「挨拶」から。すぐにでも出来る行動、自分とは違う年代と交流すること。
- (2)家族の中でも会話が少ない長寿者にも問題があり、自立を考えなければいけない。
家族の中で、地域の問題・話題を話し合うことが大切。
- (3)遠くの親戚より近くの近所づきあい、いざという時に助け合える。長寿者と若者とのふれあい交流行事参加の場づくりの努力が求められる。
- (4)昔は便利さより人の温かさがあった。今や、隣組を大切にしなければならない。若者、長寿者は互いに偏見を持たない。近所の人との関わりが重要。そこから生きがいが見つかる。
- (5)地域の福祉どころか、身内の福祉もできていないと感じる。 私たち一人一人が何をすべきかを考えていくことで、よい地域づくりにつながる。誰かがではなく、地域全体で支え合うこと。
相互に理解し、価値観を共有することが大事。
- (6)地域の人を集めるのではなく、集まる自然な地域環境づくりに努める。
- (7)損得を考えず、ご近所づきあいのは、感覚で行われるものである。
- (8)ちょっとした一言で、長寿者が地域に必要と感じることが大切。さりげない見守りがいい。
- (9)「家族に見捨てられた」と感じる長寿者が多い。 見捨てられる思いをなくし、若者が積極的に長寿者に歩みよる努力をする。
- (10)「福祉」とは、挨拶、助け合い、親切心など、当たり前なことを当たり前に行えること。福祉制度やサービスをあてにすることなく、まずは、身近な人への“お互い様”で歩み寄ること。

6. 「“若者発”ご近所福祉かるた」の誕生

こうした、尊い「長寿者宅訪問型研修会」の学びをもとに、「これからのご近所福祉」を若者たちが語り合う中で、見失った地域力を復活したい思いや、現実の生活圏域における地域への思い、今の社会を変えたいという熱い思いなどを「かるた」の「読み札」に置き換え、これまでの地域の良さをさらに強調し、実践していく呼び掛けも組み入れ、約400の「読み札」が浮かび上がりました。

「共創社会実現研究会」や「若者発“居場所”あり方研究会」を立ち上げながら、「読み札」を精査する作業に取り組みました。

「静岡発 福祉文化の創造」をめざして、多くの若者の意見をもとに取り組んできたプロセスから、「若者発」をキーワードにした「ご近所福祉かるた」の創作が具体化しました。

「絵札」は、これまで、県内外で活躍されておられる漫画家 法月理栄様のご理解とご協力により、46枚の「読み札」をもとに、コミュニティの現状や、福祉社会を取り巻く実社会等を情報交換しながら「若者発 ご近所福祉かるた」が誕生しました。この「若者発 ご近所福祉かるた」のモデル地域設定は、2,000世帯ほどのコミュニティを想定し、「絵札」は、ある長寿者をもとに、児童、青年や障害者の皆様方、子育て中の方、自治会・町内会の役員さん、民生委員児童委員さん、福祉関係者の皆様も登場し、ご近所同士の支え合いやふれ合い交流などをストーリー化し、描いていただきました。



◇「若者発 ご近所福祉かるた」が完成し、早速世代を超えた議論



◇漫画家 法月理栄様をゲストに、かるた誕生をトーク

第3章「静岡発 福祉文化の創造」と “ご近所福祉”へのプロセス

1. そもそも、「静岡発 福祉文化の創造」は、どこから？

福祉の改善・改革を「文化」の視点から研究・議論・実践する目的で、「福祉の文化化」「文化の福祉化」を掲げ、地域社会の様々な領域から、理論と実践をもとに1989年「日本福祉文化学会」が設立され、全国各地の福祉現場の実践家と福祉系を中心とする大学等の研究者の強固なネットワークにより32年間歩み続けています。

「日本福祉文化学会」の主要事業の一つに、現場に学ぶ福祉文化の取り組み（現場セミナー）があります。静岡県内では、これまで、1993年4月に静岡市内の先進的福祉施設において「第5回現場セミナー」開催の実績があります。その後、福祉文化を地域社会全体に切り拓くテーマで地域社会をフィールドとした「第11回日本福祉文化学会・現場セミナー」の開催を静岡県内で開催してほしい旨の要請を受けました。

意義ある「現場セミナー」の開催実現には、まず、広く県域に「福祉を文化にする、文化としての福祉を築く」ことに賛同する県民の呼びかけから始めなければならないと、早速、準備に取り掛かりました。そして、10代から70代の約40名が実行委員会結成に賛同され、企画運営、広報等多岐にわたる働きかけにより、1996年3月浜松市で開催することが出来ました。

セミナーの第1日目は、「浜松こども園」を会場に「福祉施設の現場実践に学ぶ」と題して、先駆的实践発表がありました。

第2日目は、プレスタワーに会場を移し「基調講演」を、学会初代会長 一番ヶ瀬康子氏が、阪神淡路大震災の政府復興委員の立場から震災と福祉文化をもとに「21世紀にむけて 福祉文化を拓く」を熱く語られました。その後、「災害と福祉文化」「働く人たちと福祉文化」「環境と福祉文化」「高齢者・障害者の余暇文化」の4つの分科会で参加者が熱心に議論を深め合いました。

フィナーレは、「静岡で語ろう、“福祉文化”を身近な地域から、自立と共生の21世紀へ」をテーマに総括討論を展開しました。2日間、全国各地から延べ400名が参集された現場セミナーでした。

この尊いセミナーのプロセスと成果を「静岡発 福祉文化の創造」と置き換えて、県内に発信しようと、1996年9月、ここに「静岡福祉文化を考える会」が阪神淡路大震災1年後に誕生しました。

その後、本会は、福祉文化実践活動に取り組む中で、2000年1月には、静岡県内では3回目となる「第18回日本福祉文化学会現場セミナー」を掛川市の「ねむの木学園」において「宮城まり子さんと福祉文化に学ぶ」をテーマに開催しました。

初代会長一番ヶ瀬康子先生と宮城まり子さんとの「福祉文化」を熱く語り合う対談から、「足元の福祉」「共生社会こそ福祉文化」を全国から参加した350名の皆様とともに学び合いました。

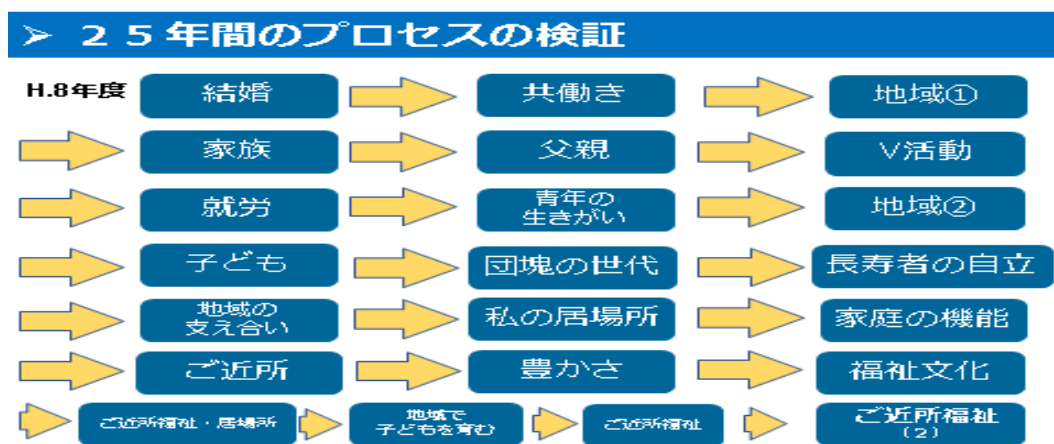


2. 25年間の「静岡発 福祉文化の創造」のプロセスとは

本会は、「さまざまな福祉・ボランティア活動に携わる人と市民がいっしょに、地域が抱える生活全般のさまざまな問題を考え、その改善のために努力する。」を活動目標にしています。そして、[3つの活動基調]により活動を展開しています。

- (1)さまざまな分野で活動する人が、専門分野と世代を超えて交流を図る。
*「市民性と専門性」「理論と実践」を『融合』する努力
- (2)会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に拓かれた活動をする。
*「公開型研修会」で市民性を高める努力
- (3)既存の福祉組織活動から取り残された問題や新しく発生した問題を大切にし、常に市民生活に密着した活動をする。

ここで、25年間をまとめてみますと、



大きな福祉文化の流れの中で、振り返ると、本会25年間の流れは、次の4期にまとめられます。

◇第1期 草創期 本会結成から実践活動6年間

平成8年度結成当時、若い世代を中心とした会員層であり、「結婚」をもとに「おいしい結婚、まずい結婚」論議を展開。その後、家庭を持った中で「共働き」を検証。「地域にどう溶け込めるか」「私たちにとって、地域とは何か」と活動を展開。希薄化した「家族・家庭の機能」を考える「私たちにとって家族とはなにか」の議論を深めた。「家族ってなにか？」の中に、「父親不在」ではないか、父親の復権こそ必要と、「父親とは何か」につなげた。そして、平成13年度「ボランティア国際年」を迎え、「真のボランティア活動とは」を活動テーマにあげた。

◇第2期 協働期 日本福祉文化学会静岡大会（平成14年）から6年間

平成12年度に「平成14年度第13回日本福祉文化学会静岡大会」開催決定を受け、改めて、「静岡発 福祉文化の創造」を基盤に参集した70名の同士とともに、議論を重ね、「富士山麓いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造」を大会テーマに、県内外から約650名が参加し、「静岡発福祉文化の創造」の議論をさらに深めた。



こうした取り組みから、県内の関係機関・団体、学校との協働による取り組みが展開された。

この6年間の議論では「大人と青年の生きがいと就労」「地域社会を誰が担うか」「子どもを取り巻く地域環境を問う」「団塊の世代の役割は何か」等、常に地域の身近な課題を活動とした。

◇第3期 実践融合期 平成20年度から27年度まで、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業（長寿者の孤立防止）」に取り組んだ7年間

本会では、「高齢者」の用語を使用せず、一貫して「長寿者」の表現をして、県委託事業に取り組んだ。「長寿者の生きがい・自立」「長寿者への情報提供のあり方を問う、日常生活と福祉情報」「長寿社会を問う」「生活圏域における支え合いとはなにか本音に迫る」「地域と私の居場所」「真の居場所を正す、家族とは何か」「家庭・家族機能」「長寿者とつながる ホットするご近所づくり」「豊かに暮らせる地域づくり」などを検証しながら、一人一人が豊かに暮らし合う地域づくりは、一体誰が担うのかを問い質した。



*この時期、県内各地域・福祉施設において「ご近所福祉の集い」や、「ご近所福祉を学ぶ」活動が展開された



◇第4期 共創社会実現期 平成27年度から現在に至る7年間

「若者の地域参加」「ご近所福祉の現状を検証」「居場所とは何か」「子どもを育む地域づくり」「ご近所福祉の再構築」「子ども発 地域づくり」を活動テーマに現在に至る。

これまで、25年間「静岡発 福祉文化の創造」を発信して取り組んできた「福祉文化実践活動」は今、ここに「“ご近所福祉”こそ福祉文化」にたどり着いたとも言えます。

3. 「福祉と教育の融合」から“ご近所福祉”を実践してきた一面も

本会では、この25年間の実践活動の中で、社会教育と社会福祉の接点を地域社会の中で試みたことが幾度ありました。それは、「長寿者に学ぶご近所福祉からの問題提起」や「ボランティア活動を福祉と教育の別々で学び合うことへの疑問」から、これらをつなぎあわせ、融合できないか、若者の地域総合型学習の問題提起からの気づきでした。

長寿者の切実な話を聞きながら、また、地域の大人社会が必死になって取り組んでいる活動に若者が活動に参加していない、後継者がいない等、地域活動を実践して、地域をいかに創り上げていくかという福祉視点と、地域社会の現状から何が課題かという社会教育視点は、決してかけ離れたことではなく「融合」して初めて、問題解決の第一歩ではないかという共通認識でした。

「社会」という「地域社会」を共有し、そこに「学び合う」と「実践し合う」ことをつなげる努力が「福祉文化の創造」と置き換えてもよいのではないかという議論でもありました。

ここで、本会が側面的に協力し、地域の中で試みた当時を写真で紹介します。

等質集団の学習・研修の場から、世代を超えたふれあい交流型研修にかえていくことの試みとして、10代から、人生の先輩の皆さんが一堂に会した学びの場をもっただけで相互理解を深める場と

なりました。なかなか若者の意見を聞く機会がない中で、新鮮さを読み取り、もっともっと、日頃の生活の中で、若者に歩み寄ることが大切だと感じ取れたこと、若者に、これからを大いに期待できる確信が持てたこと、

一方、若者の立場からは、改めて、地域社会には、奥深い地域問題があり、その課題解決に大人社会が必死になって活動していることを読み取れたこと、自分たちにもできる活動を大人たちと一緒に考えることが大切であることを学び合った一場面でもありました。



こうした、相互理解による地域づくりこそ「福祉文化の創造」と感じ取った一コマでした。

●数々の「社会教育」との融合による「静岡発 福祉文化の創造」を発信



*社会教育研修プログラムに「若者」「地域づくり」をキーワードに世代を超えた学びの場



*百歳を迎える長寿者から、若い世代の皆さんに訴えたいことがたくさんある。地域の実情を若い世代層の皆さんが学ぶ機会を多くつくることを提案された。そこで、社会教育関係者と市民が共に学び合う場に、長寿者をお迎えして、「長寿者大いに語る」が実現した。



*若者が県内各地に出向いて、高齢者とかるたでふれあう一コマ

*拡大ご近所福祉かるたを活用してご近所を学ぶ長寿者たち

第4章 「“若者発” ご近所福祉かるた」を紹介します

40のキーワードで、ご近所福祉を学びます

 <p>あ</p>	<p>あ</p> <p>ありがたい 優しい気持ち の おすそ分け</p>	 <p>い</p>	<p>い</p> <p>居るだけで 温かいなあ このまちは</p>
<p>おすそ分けは物だけではありません。心を添えた「おすそ分け」の復活を。対等で見返りを求めず、何時までも続く信頼関係。</p>		<p>今、世代を超えた地域づくりに欠かせない「居るだけのボランティア」若者も長寿者も地域に姿を見せているだけで心がホッコリ。</p>	
 <p>う</p>	<p>う</p> <p>運動会 ご近所みんな で 応援だ</p>	 <p>え</p>	<p>え</p> <p>会釈して 通り過ぎれば 顔なじみ</p>
<p>運動会には地域住民がたくさん集まります。こうした地域行事で「地域ぐるみの居場所づくり」を継続したいものです。</p>		<p>見知らぬ人でも、すれ違った時には軽く会釈をしたいものです。それだけで「他者との関係づくり」そこから信頼関係が生まれてきます。</p>	
 <p>お</p>	<p>お</p> <p>おせっかいと 思われようと も 世話をやく</p>	 <p>か</p>	<p>か</p> <p>家族とも 話しておこう 避難みち</p>
<p>昔の地域のあちこちに世話焼きさん(おせっかいはやさん)がいました。人々や地域をつなぐ「世話焼きさん」復活を。</p>		<p>災害はいつやってくるかわかりません。家族の話し合いで「防災意識」の強化が大切です。</p>	



き
 きっかけを
 見つけて広げる
 ボランティア

いつでも誰でもボランティアのチャンスがあります。「ボランティア活動」そこにはきっかけこそが大切。



く
 暗い道
 みんなで
 見守る
 光る目

みんなの目がある地域は安心安全です。ご近所力で「防犯（安全）」強化を日常日頃から心がけましょう。



け
 健康を
 見守る
 支え合い
 優しさ

一人より二人、二人よりみんなだと続くようです。「健康づくり」はご近所さん同士で「地域の輪」づくり。



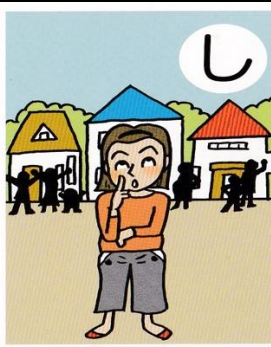
こ
 子育ては
 語る先輩
 探すこと

悩みを話せるご近所さんがいると問題解決が可能です。体験を語り合うことで「子育て支援」。



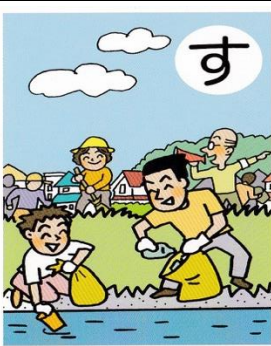
さ
 さみしくない
 一人じゃないよ
 仲間いる

地域には、悩みを持った人・孤独な人がいます。長生きの秘訣は地域の「仲間づくり」から始めましょう。



し
 知ってます？
 お隣り家族
 お向かいさん

大災害で実証されたように、「隣人」は頼りになります。普段から「隣組」との関わりをもったお付き合いを心掛けましょう。



す
 住みやすい
 まちはみんな
 創るもの

リーダー（町内会長・民生委員等）にだけおまかせでは本当の地域づくりではありません。住民参画で「地域づくり」を。



せ
 世代差を
 埋めてつなげて
 まちづくり

世代間交流に心掛けて、若者の言い分、大人の言い分を聴き合う「傾聴」で、相互理解に努めましょう。



そ
そばにいる
ただそれだけで
癒される

「そばにしてくれる、それでいい……」なんて歌がありました。それだけで「癒される人間関係」をご近所で心掛けましょう。



た
頼んだよ
手を出しあつて
明日創る

少子化、超高齢社会の今、誰におまかせでは立ち行きません。「地域福祉」はみんなの助け合いで創りましょう。



ち
地域文化
祭りや食べ物
根付いてる

伝統的な祭りや食文化は、次世代に伝えてゆかねばなりません。身近な地域の「地域文化」の発見と発展に



つ
つなげてく
手から手へと
回覧板

回覧板は最も身近な情報伝達の手段です。家族みんなに伝え、お隣さんにも一声かけ、内容をしっかりと理解し合ひましょう。



て
手伝いは
子どもの心
育ててく

子どもも家族や地域を構成する一員です。日頃から手伝いで「子どもの居場所づくり」をしましょう。



と
得意わざ
活かして参加
地域の行事

何か 1 つは他人に誇れる趣味・特技を誰もが持ち合わせています。その持ち合わせで「地域参加」をしてみましょう。



な
悩んだら
文殊の知恵で
安心地域

三人よれば文殊の知恵、地域の集まりには進んで参加したいものです。「地域の懇談会」で、住み良い地域づくりを目指しましょう。



に
にっこりと
笑顔いっぱい
おつき合い

穏やかで笑顔の溢れる繋がりが人間関係を継続させます。「さりげないつき合い」でより良い関係を創りましょう。



ぬ

ぬくもりは
サロンの仲間と
語り合い

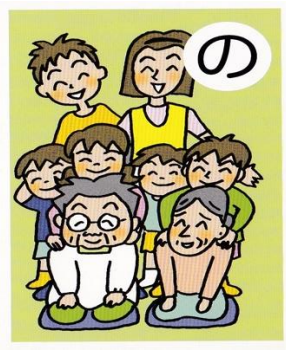
集まるサロンに笑顔がいっぱい。「集める」から「集まる」サロンこそ「真の地域ぐるみの居場所」です。



ね

ね根付いてる
地域の隅々
助け合い

助け合いの輪は地域の隅々まで広げなければなりません。隅々まで「地域の福祉力」をみんなで発揮しましょう。



の

の伸ばそうよ
思いやりの芽
福祉の芽

住み慣れた地域で、思いやりやお互い様の気持ちを広げたいものです。「地域ぐるみの福祉教育」を目指しましょう。



は

は初めの一歩
勇気を出して
地域デビュー

ボランティア活動を始めには一寸とした勇気が必要です。さあ、はじめの一歩、その勇気でボランティア活動が始まります。



ひ

ひ日暮れ時
帰る子どもに
一声を

子どもの安全・安心をいかに確保していくか、今社会全体の問題となっています。地域全体で「子どもの見守り・声かけ」を。



ふ

ふふれあいは
親子の会話
さりげなく

ふれあいの濃さは時間の長さではありません。さりげない日常会話（家庭機能）で「家庭力」を向上しましょう。



へ

へ返事にも
感謝の気持ち
付け加え

ハイという返事だけでは物足りません。一言添えて「感謝の心」を常に表していきましょう。



ほ

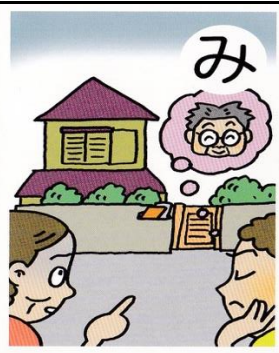
ほほめ言葉
近所の子にも
声を掛け

我が子だけでなく近所の子達も見守りたいものです。近所の子にも声を掛けて「地域の子どもを地域で育む福祉力」向上を目指しましょう。



ま
窓開けて
道行く人にも
ご挨拶

長生きは閉じこもらず身も心も外へと向けていくことが大切です。自ら進んで「コミュニケーション力」UPを。



み
見守られ
見守りつつで
暮していく

いろいろな人が暮らし合って当たり前のご近所。一声かけて安心しあえる地域づくりを日頃のお付き合いの中から作り出す努力をしましょう。



む
向こうより
素早く声掛け
こちらから

相手からの挨拶を待つことなく、こちらからさりげない言葉掛けは微笑ましいものです。「声かけ」は私たちから…。



め
目が笑う
優しい心が
人づくり

“目は口ほどに物を言う”と言われます。「ふれあい」は優しい目から、心から「アイコンタクト」。



も
問題点
たくさんあるから
チャンスあり

私たちの地域社会には、様々な地域課題があります。その「課題発見」から発想や視点を変えることで解決につながります。「地域把握」でピンチをチャンスに。



や
やかましい
大人の注意で
振り返り

昔は子どもの周りに「怒るおじさん」（やかましい大人）がいたものです。でも、そのやかましい大人も「地域の教育力」であることも。



ゆ
譲り合い
してもされても
笑み浮かぶ

思いやりの行為は、した人もされた人も気持ち良いものです。してよし、されてよし「小さな親切」。



よ
喜びを
みんなので分け合う
地域社会

ご近所の悲しみを皆で悲しみ、喜びを皆で喜び合いたいものです。「支え合う地域」を日頃から心掛けましょう。



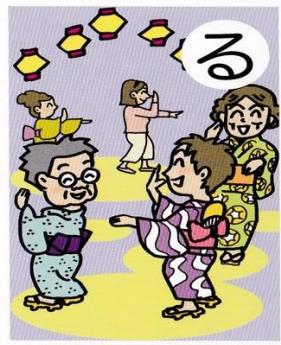
ら
ライフワーク
自慢のまちに
創り変え

一人一人が力を合わせ、活動を継続すると自慢の街が出来上がります。地域参加は「**生き甲斐づくり**」。



り
リサイクル
ゴミ出し袋も
気をつかい

安心・安全な街は清潔な地域環境から生まれます。「**環境美化**」は正しいゴミ出しから。



る
ルンルンと
地域行事に
胸躍る

老若男女、誰もが楽しめる祭りが地域を盛りあげます。祭りなどの「**地域行事**」で町おこし。



れ
連絡は
伝える相手
言葉選び

地域には長寿者や障がい児・者の方々やいろいろなハンデを持つ人がいます。連絡・報告・相談時の言葉や態度はしっかりと、「**相手理解**」をしましょう。



ろ
老人を
長寿者と呼び
知恵を借り

亀の甲より年の功、長寿者に学ぶことは、いろいろな場面で大変多くあります。「**長寿者の社会参加**」で地域力向上に努めましょう。



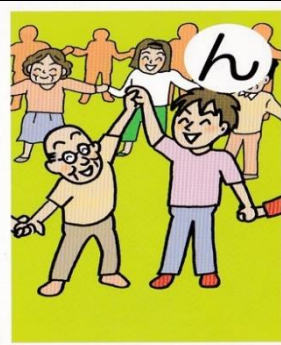
わ
若者が
未来の地域を
創って

今こそ、大人社会が**若者の地域デビュー**をしっかりと創り、機会を提供する時期が来ています。「若者の居場所」は地域にあります。素敵な魅力ある地域づくりを目指し、「若者参加」を大いに働きかけましょう。



を
ご近所を
福祉でつなぐ
かるた会

「若者発 ご近所福祉かるた」の読札や絵札を使い、大いにコミュニケーションを深め**地域を学び**ましょう。



ん
いたわりで
人の輪づくり
結ぶ縁

人と人が触れ合うことで地域が盛り上がりまます。福祉文化の盛り上げは「**コミュニケーションづくり**」。

第5章 「“若者発”ご近所福祉かるた」各領域からの活用事例

1. 「“若者発”ご近所福祉かるた」誕生5年間の各地の活用から見たもの

令和3年度赤い羽根共同募金助成事業「“若者発 ご近所福祉かるた”活用拡大と住民福祉教育開拓事業」に取り組むにあたり、本会が、平成27年度 共同募金（一般募金） 地域福祉助成事業により、取り組んだ「若者発 ご近所福祉かるた」の誕生で「かるた」を提供した、16の団体・グループ・福祉施設等の各領域から、これまでの5年間の活用状況を取りまとめました。

(1)この5年間の活用状況

- ・当初は、代表者の思いにより、積極的に活用していたが、代表が交代した後は、「かるた」の持つ意味を、グループ全体が十分理解できず、活動の中で活用する機会が少なくなった。
- ・公的機関（社会教育機関）では、職員の異動で、「かるた」の存在を引き継ぐまでに至っていない。これまでの活用実績記録がない。 公的機関の「図書室」に置き、近隣の団体や個人にいつでも貸し出しが出来るようにしている。
- ・当初は、珍しく、思いつきでも活用する機会を持っていたが、団体のメンバーがかわり、活用方法を充分理解できずに、単に保管されている状況である。
- ・常に活動に取り組んでいる団体から、有効活用するために、「購入」の希望を申し出た。
- ・老人クラブ等の活動として、地域に根づく目的で、「かるた」の「購入」希望を申し出た。
- ・管内の子ども会の積極的な世話人から、教材として提供の希望が出ている。
- ・熱心なまちづくり推進協議会の役員から、教材として、「かるた」提供の希望が出ている。

(2) 主な活用展開方法

- ・定例の居場所開所日の当日の利用者の状況をみて、支援者同士が活用を申し合わせている。
- ・定例の居場所開所日に、テーマを決めて活用する努力をしている。意外と話題が広がる。
- ・小グループにわかれて、支援者(ボランティア)が読み札を読み、利用者(参加者)が絵札を取る、一般的なかるた取りを活動の中で位置づけた。 日常の地域の話題とともにひと時を過ごせる。
- ・町内のサロン活動で、地域の話題を話し合いながら活用してきた。
- ・認知症カフェにおいて、「かるた」をあらかじめ選択して、具体的に時間をかけて方向付けた。
- ・地域のふれあいサロンにおいて、「読み札」を参加者が順番に読みながら、参加者同士の関係づくりを大切にし、楽しい雰囲気を持続した。
- ・「ご近所」の今昔、大人の言い分若者の言い分など、時代回想や、世代間交流について学べる素材である。10名程の集会に、かるた2セットを活用し、小グループで、かるた取りとご近所あれこれを語り合った。若者が加わると、年配者が、地域を語る中で相互学習の環境にもなった。
- ・あまり競争意識を持った「かるた取り」にならないように、事前に展開方法を説明すると、参加した年配者は、気軽に普段の楽しいひと時を過ごした。
- ・参加者全員が参加できる展開方法を、リーダーがしっかりと方向づけると、上下関係の雰囲気が対等な関係になり、和やかさが増す。 自分の地域を見直す、そしてこれからの地域づくりに向けて出来ることをやろうと誓い合っていた。
- ・「ふくしのかるた」であることを最初に参加者にしっかりと伝える。

- 「読み札」は、参加者が一人一人順番によみ、参加者同士が共有した環境を創る努力をしていく。声が小さかったり、わかりづらい時には、隣の人が援助していく約束も創りながら楽しんだ。それぞれの「かるた」から、家族、防犯、ささえあい、こども・・・などのキーワードごとに「かるた」をまとめることも試みた。
- ・「キーワード」ごとに、「カルタの絵札」のしまをつくり、参加者に考えてもらう展開をした。集中した取り組みが伺えた。
 - ・施設の記念行事のプログラムに活用した。施設職員研修に活用し、職員の地域参加を促した。
 - ・民生委員活動の一環として「地域の一人暮らし高齢者の集い」において活用した。いつも、同じような活動内容に偏りがちであるが、今回は「かるた」を活用して、本人の取り巻く環境を語り合った。「かるた」の活用で、一人一人が居住する地域性を念頭に、間接的支援方法が浮き彫りになった。
 - ・「かるた」の活用を、導入段階で、事前により具体的に説明してから入ると、盛り上がりが違う。開始当時は、「かるた」に対する批判的な意見から、そのうちに、今後を見据えた意見に発展している。支援者（ボランティア）は、「かるた」の持つ意味をしっかりと理解していくことが重要。
 - ・高齢者の場合、特に、ゆっくりと時間をかけて、わかり易く説明した「かるた」の活用が大切。
 - ・この「“若者発”ご近所福祉かるた」には、いろいろと工夫されていることがわかった。「昔のあそびと今の遊び」を合間に話したり、「じゃんけんゲーム」等、「手遊び」を組み合わせた取組みで盛り上がった。

2. 領域別活用事例と今後に期待すること

(1) 領域別活用事例を整理すると

●福祉施設

- ・声が小さかったり、わかりづらい時には、隣の人が援助していく約束をしながら楽しんだ。それぞれの「かるた」から、家族、防犯、ささえあい、こども・・・などのキーワードごとに「かるた」をまとめることも試みた。
- ・施設の記念行事のプログラムに活用した。
- ・施設職員研修に活用し、職員の地域参加を促した。
- ・施設訪問する生徒には、施設利用者とのふれあい交流の時間に「かるた」を活用し、生徒には、施設利用者も、これまで、地域で生活され、地域の担い手として活躍されてきたことを理解する働きかけをした。こうした「かるた」があることを説明した。

●サロン・居場所

- ・小グループにわかれて、支援者(ボランティア)が読み札を読み、利用者(参加者)が絵札を取る、一般的なかるた取りを活動の中で位置づけた。
- ・町内のサロン活動で、地域の話話を話し合いながら活用してきた。
- ・認知症カフェにおいて、「かるた」をあらかじめ選択して、具体的に時間をかけて方向付けた。
- ・地域のふれあいサロンにおいて、「読み札」を参加者が順番に読みながら、参加者同士の関係づくりを大切に、楽しい雰囲気を持続した。
- ・定例居場所において、プログラムとして活用している。
- ・高齢者の場合、特に、ゆっくりと時間をかけて、わかり易く説明した「かるた」の活用が大切。
- ・「かるた」と「手遊び」を組み合わせた取組みで盛り上がった。
- ・サロン定例会で「かるた大会」として、小グループごとに競い合ったら、童心にかえり賑やかだった。

●地区社協

- ・「ご近所」の今昔、大人の言い分若者の言い分など、時代回想や、世代間交流について学べる素材。
- ・10名程の集会に、かるた2セットを活用し、小グループでご近所あれこれを語り合った。
- ・「キーワード」ごとに、「カルタの絵札」のしまをつくり、参加者に考えてもらう展開をした。集中した取り組みが伺えた。
- ・「かるた」の活用を、導入段階で、事前により具体的に説明してから入ると、盛り上がりが違う。「かるた」に対する批判的な意見から、今後を見据えた意見に発展している。

●学校教育

- ・「ふくしのかるた」であることを最初に参加者に伝える。
「読み札」は、参加者が一人一人順番によみ、参加者同士が共有した環境を創る努力をしていく。
- ・専門学校では、地域のニーズを学ぶ教育に活用。

●地域行事

- ・若者も加わり、年配者が、地域を語る中で相互学習の環境にもなった。
- ・あまり競争意識を持った「かるた取り」にならないように、事前に展開方法を説明すると、参加した年配者は、気軽に普段のお喋りをともにしながら、楽しいひと時を過ごした。
- ・参加者全員が参加できる展開方法を、リーダーがしっかりと方向づけると、上下関係の雰囲気に対等な関係になり、和やかさが増す。自分の地域を見直す、そしてこれからの地域づくりに向けて出来ることをやろうと誓い合っていた。
- ・「地区福祉まつり」の会場に展示をし、コーナーを設けて、世代間交流の「体験型遊び」を展開した。

●福祉領域研修

- ・民生委員活動の一環として[地域の一人暮らし高齢者の集い]において活用した。
いつも、同じような内容のプログラムであったが、今回は「かるた」を活用して、本人の取り巻く環境を語り合った。一人一人に合った、間接的支援方法が浮き彫りになった。

(2) 今後に期待すること

- ・地域の「住民福祉教育」の実践的教材として、積極的に広報活動をしていくことが必要である。
管内の関係者(ボランティア・地域実践者・自治会・町内会役員、民生委員・さわやかクラブ)に呼びかけるとともに、活用方法の研修の機会をもつこと。
また、世代間交流の場で、積極的に「かるた」を活用する工夫。
- ・福祉施設では、常に、活動現場を持っていれば、活用方法を念頭に取り組むが、実践現場を離れると柔軟に活用することが難しい。施設全体で、「施設の社会化」に向けて有効活用を位置付ける。
- ・団体全体が問題意識をもって、活動に取り組む中で、こうした「かるた」の導入方法を中長期計画の中で、確実に活用する方法を具体化する。そして、住民の相互の意識啓発に努める。
- ・各種障がい者(視覚・聴覚の不自由な人、認知症)でも、活用できる工夫。(拡大かるたの活用)
- ・「かるた」には、「ジャンケンゲーム」や「昔の伝承遊びの回想」等が展開できるため、メリハリをつけて楽しめることを理解する。
- ・生活に密着した言葉が工夫され、「かるた」全体がわかりやすく、親しみやすい感じを受ける。
「かるた」1枚1枚から浮かびだされた、内容を確認しながら、地域の現状を再認識すること。
そして、それぞれの地域の課題解決に向けた学習の展開につなげる努力が必要。「かるた」は、地域を知ることができる。改めて「ご近所」をテーマに「読み札」を考えていくことが必要である。

第6章 「“若者発” ご近所福祉かるた」 の活用方法は無限です

◇ 「活用レポート」をお寄せください

(1) 従来型活用方法

読み札を一人が読み、参加者が絵札を取り、取った絵札の枚数で勝負を決めます。

(2) グループワーク的活用方法

読み札に託されている「キーワード」をファシリテーター(進行役)が選択し、その読み札の内容解釈をグループごとに話し合い、出された意見をまとめていきます。グループごとに出された意見を全体会で紹介し、共通理解を深めたり差異を認め合ったりします。

(パワーポイント併用効果大)

(3) 絵札の拡大コピーを会場に提示した集団活用方法

体育館など広い会場での学び合いでは、拡大絵札で“見える化”し、小グループの代表者が交代で取ることも面白いでしょう。身体を使うことで、適度の動きを伴うダイナミックな楽しみとなります。また、拡大絵札を活用して「ご近所福祉」を語り合う場にもなるでしょう。

(本会に「拡大かるた」4セット保有し、貸出ししている。)

(4) 課題解決型活用方法

絵札が拾われた都度、その絵札に描かれている状況をもとに議論し「ご近所福祉」の理解を深め合います。

利用状況により、かるたの枚数を調整して展開します。



◇かるたを媒体に「私の地域」を語り合う

(5) その他の活用方法

① 札だしジャンケンゲーム

かるたの裏には、「グー」「チョキ」「パー」のジャンケンの表現が描かれています。

参加者に同数のかるたを配り、合図で一斉に札をだし、勝った人は負けた人の札を貰います。

手持ちの札が終ったところで終了とします。

② 絵合わせゲーム

かるたの裏には、赤い羽根のキャラクターが描かれています。

同じ赤い羽根のキャラクターの絵合わせをして楽しめます。

③ 「昔のあそび」を学ぶ

かるたの裏には、懐かしい昔のあそびが描かれています。

「昔と今のあそび」を世代を超えて語り合い学び合います。



◇子供同士のふれあうひと時に「かるた」

●ここにあげました、「若者発 ご近所福祉かるた」の活用方法は、ほんの一例です。

活用する団体、グループ、地域、学校の実情に合わせた取り組みを期待します。

活用した団体、グループ、地域、学校等は、「活用レポート」(次頁参照)を本会までお寄せ下さい。



◇大人社会が地域の実情をかるたをもとに語る



◇とにかく、楽しいを創る地域 親子でかるた取り

「若者発 ご近所福祉かるた」活用レポート

活用月日	令和 年 月 日 (曜日) : ~ : (時間)
活用会場	
活用目的	
団体名 (代表)	住所 〒 - 団体・グループ名 代表者(責任者) 担当者名
参加者層 計 名	(1) 年代 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70以上 (2) 性別 [男性 名] [女性 名] (3) 領域 幼児 名 小学生 名 中学生 名 高校生 名 大学生 名 有職者 名 年金生活者 名 その他 名
活用方法	
課題整理	
所見(考察)	
●「静岡福祉文化を考える会」へのメッセージ	

★各団体・グループの皆様へ:

「かるた」を活用しましたら、このシートをコピーしてご意見をぜひ、お寄せください。

静岡福祉文化を考える会 FAX054-624-1924

「赤い羽根共同募金」を学ぶ 「“若者発”ご近所福祉かるた」の活用

「静岡福祉文化を考える会」が、2021年度、静岡県内の小学4年生から6年生対象に「福祉ってなに？子どもたちに聞きました」の調査研究活動を実施しました。

この調査内容に「あなたは、赤い羽根共同募金を知っていますか」の問いかけをしたところ、345名の子どもたちのうち86%から「知っている」と回答をいただきました。

その回答の中に、「どんな活動か、詳しくはわかりません。しっかりと学びたい」「街頭で募金活動をしている人を見かけました」「私の学校でも、福祉活動として赤い羽根共同募金活動に取り組み、集まったお金を町の社会福祉協議会に届けました」といろいろとメモが書かれていました。子どもたちの調査回答・メッセージから、大人社会は、長い歴史のある「赤い羽根共同募金活動の仕組み」や「赤い羽根共同募金の活用（配分）」そして、「赤い羽根共同募金によって、地域の福祉問題が改善・発展していること」を理解し、子どもたちとともに、地域活動参加を考えていきたいものです。

「何のために赤い羽根共同募金活動をするの？」→公的制度では、全てを解決できないこと、県民一人一人が出来るささえあいを考えていくこと、「私たちが出来る募金活動を考える」→福祉施設や在宅で生活している方々の生活の支援を考える、「私たちが実践した募金活動でどのように地域社会が変わったか」→関係団体からの報告をもとに「福祉教育」を深めていく。

こんなプロセスを大切にしながら、「私が変わる、地域が変わる 住みよいまちづくり」を描いていきたいものです。

県民の皆様方からの「赤い羽根共同募金」により、「静岡福祉文化を考える会」では、「“若者発”ご近所福祉かるた」を2年間議論を重ね誕生させました。

そして、このたび、「かるた」の増刷とともに「かるた利用の手引き」を作成し、さらに、「住民福祉教育」の開拓をめざします。

「かるた」には、各読み札・絵札に「3種類の赤い羽根マーク」を組み入れています。また、全ての「かるた」に「赤い羽根共同募金」を共に実践活動につなげる「キーワード」を組み入れています。ぜひ、有効に活用してください。

これからの “福祉” を考えるネットサイト

- QRコードから、簡単にジャンプできます。知識と知恵を見につけましょう。「静岡県共同募金会」のHPにもリンクします。

静岡福祉文化を考える会

静岡福祉文化を考える会

「静岡福祉文化を考える会」は、さまざまな福祉活動に関わる人と市民が互いに、地域が抱える生活年齢のさまざまな問題を考え、その改善のために努力していくことを「福祉文化」ととらえて活動しています。活動内容は主に、公開型学習会としての委員会、公開型研修会、福祉文化研究セミナー、調査研究活動、機関誌「Our life」の発行などです。（平成8年9月にスタートし、県内全域で活動中。）

リンク集
日本福祉文化学会
焼津福祉文化共創研究会

プロフィール
静岡福祉文化を考える会
プロフィール
ブログ

赤い羽根共同募金
社会福祉法人 静岡県共同募金会
2021年10月06日
福祉かるた増刷配布計画

タグ: ささえあい 静岡の福祉



* 静岡福祉文化を考える会 QRコード

協働団体 焼津福祉文化共創研究会

焼津福祉文化共創研究会

平成28年度から平成30年度まで3年間にわたり、いかに、「共創・近隣の地域を再構築することを目指すか」を目的に、住民主体の企画運営により、「焼津城合さえあい講座」（巻第14・20自治会）と「焼津城合さえあい講座」（巻第14・20自治会）を開催しました。この講座期間に結成された実行委員会と地域活動に熱心を持つ市民(14名)が、これまでの市民とさらに地域づくりを促さそうと、2019年10月に「志願団体」として「焼津福祉文化共創研究会」(福文共)が誕生しました。

blog profile
アクセス報告 | Main | 活動計画

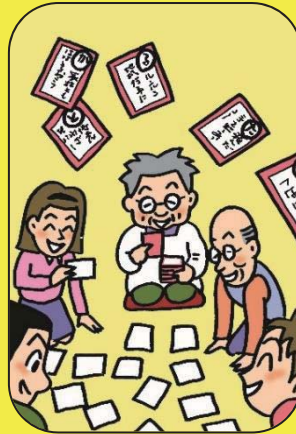
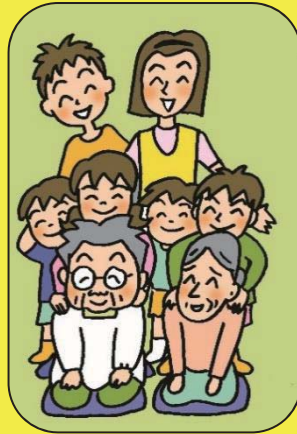
2021年10月06日
福祉かるた増刷配布計画

検索
検索語句
検索

プロフィール
焼津福祉文化共創研究会
プロフィール



* 焼津福祉文化共創研究会 QRコード



静岡発 福祉文化の創造を切り拓く 若者発 ご近所福祉かるた 利用の手引き

- 企画・制作：静岡福祉文化を考える会
〒421-0841 静岡市清水区追分 3-5-17 NPO 法人泉の会内
TEL: 054-367-2878 FAX: 054-367-2884
- 作 画：漫画家 法月 理栄
- 協 力：焼津福祉文化共創研究会 共創社会実現研究会
- 編 集：原崎 洋一・河野 恵介・古屋 貴彦・平田 厚
- 発 行 日：令和3年11月27日
- 印刷・製本：有限会社 シブヤ印刷工芸社
〒425-0057 焼津市下小田 637



この手引書は、赤い羽根共同募金助成事業により作成しました。